

都鄙のあいなか 中世の京都をめぐる

鋤柄俊夫

Between Urban and Rural Communities: Centering around Kyoto in the Middle Ages

はじめに

- ①都市の風景
 - ②都市の風貌
- おわりに

【論文要旨】

中世における都市遺跡研究のひとつのテーマは、遺構と遺物によって再構成される遺跡の空間構造から、各時代における社会の仕組みとその変化過程を説明するところにある。これまで京都の考古学資料は、その量が多岐に膨大であったために、筆者を含めて、ヴァーチャルな総体としての京都の検討はなかなか進んでこなかったものの、遺跡の空間構造を復原するために必要な、調査地点個々の特徴は、ほとんど検討される機会がなかった。そこで小論ではこの点に注目して、中世の京都においてどのような遺構や遺物が、いつの時代に、どの場所から検出され、それらは京都全体の中でどのような意味をもつことになるのかを問題の所在とし、一般に京都系「かわらけ」と呼ばれている京都型の土師器皿に注目し、その伝播の背景を考えると、中世都市京都が持っていた強い影響力の一端の復原を第①章とし、第②章で中世の京都の中でも、おおむね三条以南に焦点をあて、都市の様々な場が果たした役割の意味を、空間

構造の視点から考えてみた。

その結果第①章では、土師器皿の一方で西日本に伝播した瓦器碗の背景が石清水八幡宮と宇佐宮弥勒寺の関係によって説明できる可能性を踏まえ、中世前期の東日本に伝播した京都型土師器皿の背景を日吉山王宮と白山社の中で考え、第②章では京都駅周辺地域の詳細な調査地点分析によって、当時の政治の中心であった武家と八条女院および東寺を背景とした七条町の再評価をおこない、さらに下京に多く見られる石鍋の分布から東福寺の影響力の強さについても検討をおこなった。

中世の京都がもっていた多様な側面を、下京を対象に京都以外の地域との関係の中から逆に浮かび上がらせることにより、中世都市京都の特質の一端としての京都と京都以外の地域を結びつけていた宗教的側面または神社の果たしていた役割の大きさをあらためて確認することができたと考える。